

LIVE & GEAR 来日ライブ・レポート&オマー's最新ツアー機材紹介!!

# THE MANS VOLTA

## feat. Omar Rodriguez

### "THE BEDLAM IN GOLIATH" TOUR in JAPAN 2008

## 秩序ある混沌のパフォーマンス!!

その変幻自在の轟音でオーディエンスをカオスへと引きずり込んだ、  
"音の魔術師"オマー率いるマーズ・ヴォルタの激演模様をここにレポート!!

レポート ● 下総淳哉 Junya Shimofusa pix: Kentaro Kambe (live)

< SET LIST: at Shinkiba Studio Coast, Jun. 13, 2008 >

1 Intro Song 2 Viscera Eyes 3 Wax Simulacra 4 Goliath  
5 Ouroboros 6 Tetragrammaton 7 Aberinkula



Omar Rodriguez (g)



### 刹那の感覚を反映した音の創造

マーズ・ヴォルタの音楽を語る時、最も重要なコンセプトの1つがリズムである。バンド設立当初から中心メンバーであるオマー・ロドリゲス(g)はリズムにこだわり、特に自身のルーツでもあるサルサなどを感じさせるビートをを用いることを1つの大きなテーマに掲げていた。しかし、それを実現する上で大きなウェイトを占めていた初代ドラマー(ジョン・セオア)が'06年に脱退。バンドの根幹を成すパートだけに後任の選出は難航したが、間に2人のサポート・ドラマーを扶んで、'07年にトーマス・ブリジエンが正式メンバーとして加入する。4代目ドラマーとなったトーマスの持ち味は豪快な叩きっぷりと手数が多い。その野蠻溢れるビートは、ロック色の強い最新作『THE BEDLAM IN GOLIATH』('08年)の作風にも大きな影響を与えていた。そして、今回はトーマス参加が初めての来日ツアーである。それだけに大いに注目を集めることとなった。

結論から先に言うならば、アルバム同様にライブもロック色が強まった印象が強い。パワフルかつしなやかな変化に富んだドラマーであったセオアに比

べ、先述の通り、トーマスは手数とパワーで勝負するタイプ。その稲妻のようなドラミングが自ずとバンドのロック面を強調していた。それは一見、冒頭で記したバンド・コンセプトから外れているようにも思えるが、マーズ・ヴォルタにはもう1つ即興主体というコンセプトがある。その点に於いて、トーマスの持つ攻撃的なスタイルは前任者達よりも遙かにバンドを刺激するのだらう。演奏全体にインタープレイの占める割合が増加。オマーもトーマスを始め各メンバーとアイ・コンタクトを繰り返し、即興主体の演奏に巧みに緩急をつけるとともに、より闊達なプレイに没入。足下に並べたエフェクターを感覚的に踏み分け、次々と予想外のサウンドを生み出していった。

オマーが操る数々のエフェクターのうち、最も使用頻度が高かったのがアナーキーボールのワウ・ペダルである。下頭のジャム[Intro Song]から基本的にほぼ踏みっぱなし。あらゆる場面でフレーズにワウ効果を絡ませていく。ワウ・ペダル自体は以前から足下にセットしてあったが、ここまで多用したのは今回が初めて。これは恐らく、ドラマーの問題が解決し、より創造性を発揮できる体制が固まったことで生じた結果だらう。瞬間的に感覚を音に反映することができる

ペダルは即興の中で大きな武器になる。即興の余地が拡大した中、オマーがワウに大いなる可能性を感じ始めたというのは想像に難くない。トーマス加入の影響は意外にもこうした部分にも表れていたのである。

マーズ・ヴォルタのライブでは、披露される楽曲はアルバム通りどころか一旦バラバラに解体され、モチーフのみを生かした形で再構築される。自ずと楽曲は刻々とその表情を変え続け、緊張と弛緩が超スピードで入れ替わる。そしてそれこそがマーズ・ヴォルタの生命線だ。言い換えるならば、彼らにとって重要なのは楽曲ではなくむしろ演奏。1回のライブは1つの作品である。だからこそオマーも大量のペダルをステージに用意しているのだらう。常々あれだけの数のエフェクターが本当に必要なか疑問に思っていたが、使うとか使わないではないのだ。オマーにとってはスタジオもライブも一緒、等しく創作の場なのである。彼の意識の中では毎晩、新作を作っているようなもの。ならば、創造のための道具であるエフェクターも常にその場になくってはならない。予め目的が定められているわけではないのだ。オマーの足下には、何かを生み出すための"可能性"が並べられていたのである。それがよく分かったライブであった。